

慈濟 241

ものがたり

慈濟基金會
2017 年 1 月

TZU CHI ● ツーチー



表見返し●

文・證嚴法師／訳・済運／撮影・涂鳳美

善でこの世を護る

内に清らかな心を育むのが「功」で

外に菩薩道を歩むのが「徳」です

息長く功德を育めば

人の世は平和になり

善行で福を集結すれば

世界は安らかになります





シエラレオーネ共和国のコインドゥ地区のエボラ出血熱で親を亡くした孤児は善意の人のおかげで教育を受けている。この子供達もエボラ出血熱に感染したが、幸いにも生き延びた。しかし、辛い治療と親を亡くした悲しみは、彼らの心身に大きなダメージを与えた。
(撮影・蕭耀華)

目次

【表見返し】
善でこの世を護る
済運／訳 1

【社論】
一粒の種から菩提の林に
慈願／訳 4

【主題報道】
シエラレオーネでの人道支援
エボラ出血熱発生之地
済運／訳 8

【健康ボックス】
カルシウムで骨密度を高めよう
葉美娥／訳 28

【職人精神】
泉興畳店
青木芳味／訳 34

【證嚴法師のお話し】
いかなる逆風に対しても
感謝の気持ちで向き合おう
慈願／訳 54

【健康ボックス】
蘇玉雲の毎分每秒
黒川章子／訳 66

【華人の本領発揮・マレーシア】
生命教育と慈善の新しい試み
慈願／訳 78

【世界の慈済・インドネシア】
アンジェリーにあげた贈り物
慈願／訳 90

【衲履足跡】
法髓移植
心嫻／訳 97

慈済大事記【十一、十二月】
済運／訳 104

一粒の種から菩提の林に

《無量義經》の「法義展転無量」に、「一種子より百万生じるが如く」と記されている。

初冬の時節、證嚴法師は四方から帰ってくる海外新任慈濟委員^{ツーチー}たちの認証の席で、「大心願を立て百万の種子を生じさせ大樹に育てよう」と励まされた。

慈濟は一九九一年より国際慈善援助を展開してきた。これまでにその足跡は地球を半周している。五十六カ国に支部や会所を設置して、ネットワークを展開している。證嚴法師の慈悲濟世の立願は善意の人々の共鳴を引き起こ

し、一粒一粒の種に滋養を与え、海外に根を下ろしている。

この種は主に台湾人ビジネスマンや華僑が主で、法師の「頭上に人様の天を頂き、足元に人様の地を踏むからには、その土地で得た物へのお返しをその土地にしなければなりません」との教えに従い、現地の貧困家庭に関心を寄せ、必要に応じて救済を行っている。民族、文化、宗教の違いを克服して、誠意ある正しい行いによって信任を得ている。彼らはさらに現地の人々にボランティアに参加するようにも導いている。

一から百万に増えたこの慈濟の種の間には、社会的地位の差も存在しない。今年台湾へ認証を受けにきた千人近くのマレーシアの慈濟委員（慈濟の幹部ボランティア）の中には、かつて貧困や病気のために慈濟の支援を受けたことがある人や、腎臓病で慈濟の透析センターに通っている患者がいる。彼らは生活が自立した後、感謝し恩返しをしたいと、自分たちが支援を受けた経験を活かして、苦難の人たちを労わっている。

海外から台湾へ認証を受けにくる現地ボランティアの数は近年増加している。例えば、他民族国家であるマレーシアでは、インド系マレーシア人のボランティアが現れた。この人は二〇〇四年、スリランカのインド洋大津波の後、慈済の支援と関心を受けて、家族を失った心の痛みが徐々に和らぎ、今では楽しくボランティア活動に励んでいる。

ミャンマーのボランティア、ウー・デイントンは二〇〇八年のサイクロン・ナルギスの後、慈済が配付した種もみを受け取りにきた時に慈済を知った。度重なる天災と害虫の被害で畑は何度もめちやくちやになったものの、今では農薬を使わずに大地を保護している。そして竹筒精神（慈済設立初期、各家で竹筒に硬貨を貯めて救済募金にした）に習って、村の人々に一日一握りの米を「米貯金」として蓄えるよう奨励している。経済的に豊かでないオーストラリアの現地ボランティアは、慈済人の環境保全の行動に感動して参加

するようになった。

大愛精神を実践する方法は違っても目的は同じである。ローマ教皇は二〇一六年を「いつくしみの特別聖年」と定められ、積極的に各宗教の代表と対談された。十一月初め、バチカンでは宗教対談に慈済人の参加を要請し、教皇は「慈悲」と「愛」は万物に滋養を与える母性愛のようで、今の世の中はとくに必要と言われた。

證嚴法師が五十年前に三人のカトリックのシスターと話をしたことが、慈済を創立したきっかけの一つだったことを、證嚴法師は今でも忘れない。当時、発願した慈悲の心はその後四方に向かって種を撒き、深く耕し、今では菩提の林に生い茂り、苦難の人々の拠り所となって平穏と情けを与えている。

シエラレオーネでの 人道支援

◎文、撮影・蕭耀華
訳・済運



エボラ孤児

2014年5月、シエラレオーネ共和国で勃発したエボラ出血熱は多数の国民の命を奪った後、多くの孤児を残した。とくに初めて感染が確認された東部の町コインドゥでは、両親を亡くし、自力で生きてはいけない孤児がたくさん残された。親戚は病気の感染を恐れて引き取ろうとせず、孤児の問題は伝染病の大きな後遺症となっている。写真はコインドゥで撮影したエボラ孤児たちで、彼らは現地の善意の人たちの援助の下に生活し勉強をしている。だが、将来はどうなるのか。その運命は誰にも分からない。

EBOLA virus

エボラ出血熱発生之地

二〇一三年、西アフリカの三つの国でエボラ出血熱が大流行した。感染者は二万八千人以上に達し、その半数がシエラレオーネに集中していた。

かつて黒人奴隷の輸出拠点で、イギリスの植民地だったシエラレオーネは、独立して自由を勝ち取った。しかし、相次ぐ内戦と特効薬のない疫病が襲い、国の未来は暗澹たるものであった。

台湾を出発して三十三時間、四回飛行機を乗り換え、黄昏時にやっとシエラレオーネの首都フリータウンに着いた。

フリータウンに着くと、一昔前の映画「野生のエルザ」の主題歌「ボーンフリー」を思い起こさせた。歌詞の内容はアフリカの大草原でライオンが自由自在に走り回って戯れるというものである。フリータウンはどこにあるのか？ 名前の由来は？ どうしてライオンを連想させるのか？ なぜ遙か遠くからここにやって来

たのか？

話は遙か昔の一四六二年に遡る。文献によると、当時、ポルトガルの船団が西アフリカ沿岸に上陸し、要塞のような貿易拠点を築いた。彼らが地図を作製していた時、海岸線から遠くない丘の形状が雌のライオンに似ているのを発見し、そこをポルトガル語でライオン山 (Serra Leoa) と命名した。

その後、西洋列強が競合する中、スペイン人がその地に強力な影響を持つようになり、名称もポルトガル語の Serra Leoa からスペイン語の Sierra Leone に変更されて今に至っている。

西洋列強にはその二カ国のほか、オランダとフランス、そして、最後にイギリスも加わった。植民地大国は次々に自国の貿易拠点を築いたが、主要な貿易品は鉱物と材木のほか、黒人奴隷の売買であった。彼らはアフリカ大陸の各地で強制連行した大量の黒人奴隷をこの港から輸出した。

奴隷貿易はアメリカの南北戦争終結（一八三五年）まで続けられ、その後、憲法で認められていた奴隷制度が廃止された。シエラレオーネから輸出された黒人奴隷はヨーロッパやアメリカ、カリブ海一帯からシエラレオーネに送還されて



□ シエラレオーネ共和国プロフィール

位置：アフリカ西海岸、北部はギニア、東南はリベリアと国境を接している。
 面積：71,740平方キロ
 人口：707万
 首都：フリータウン
 貨幣：レオーネ
 為替レート：1米ドル=5309レオーネ
 言語：英語、クリオ語
 宗教：人口の6割がイスラム教、次にキリスト教と土着信仰
 歴史：約500年前にポルトガルの冒険家が上陸し、ヨーロッパへの奴隷の供給地となった。1787年奴隷解放運動が起こり、フリータウンができた。イギリスの植民地を経て、1961年に独立。

一つの地域に集められた。そこがフリータウンと名付けられたのは、シエラレオーネに戻った人々がもう奴隷ではなく、自由の身であることを意味した。

独立して半世紀 脆弱な基盤

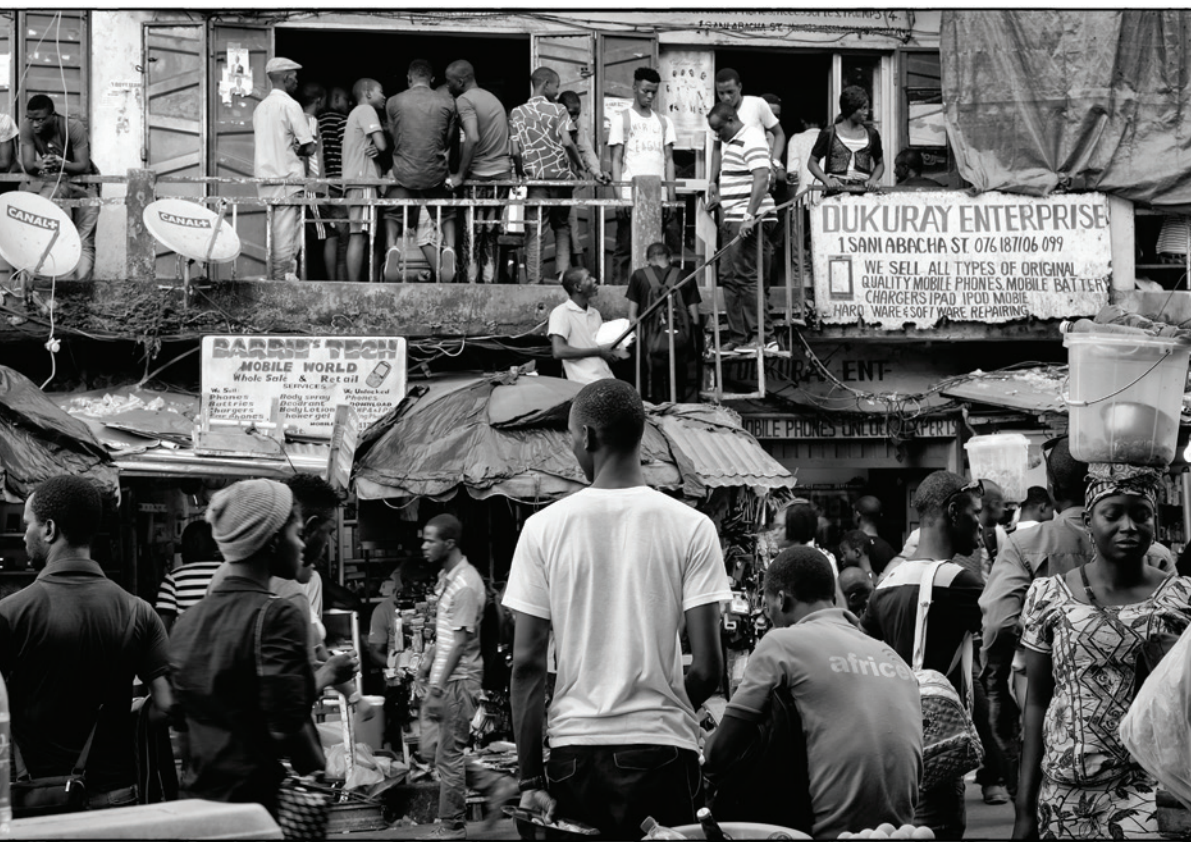
資源やそのほかの経済的利益を獲得するため、イギリスはシエラレオーネで活発に経済活動が続け、この国の発展を左右する影響力を持つようになった。

一九二四年、イギリス政府はシエラレオーネの国土を二分し、フリータウンと

海岸一帯を植民地にし、内陸部を保護領とした。

一九六一年、イギリス政府の承認を経て、シエラレオーネは独立宣言した。独立後の国名はシエラレオーネ共和国である。面積は七万七千七百平方キロで二〇一五年の統計によると、人口は七百万強である。

国土は台湾の約二倍であるが、鉱物資源が豊かで、とくにダイヤモンドの産出量が多い。そのような条件の下で数百万の国民を養うのは難しいことではない。事実、建国当初は豊かな生活と共に平和な時が流れた。しかし、それも長く続か



フリータウン市街地

シエラレオーネ共和国の首都フリータウンには工業、商業が集中し、人口も100万人を超えている。街は人で溢れ、商売は活気に満ちている。

シエラシオーネ

ず、政府の一部の制度や執行面で問題が発生した。陰謀が絶えず、強権グループが出現して豊かな国の鉱物資源を強奪しようとしたり、果ては軍隊の内部でも意見が分かれ、派閥が林立して勝手に行動するようになった。クーデターが起きても優劣がつかず、ついに内戦に発展した。内戦は一九九一年から二〇〇二年まで続けられ、約五万人が亡くなり、数十万人が住む所をなくした。また、数多くの民衆が今回の内戦で手足を切断された。手足を切断することは警告の意味であり、アフリカの集落がよく使う方法であ

る。しかし、実際に手足を切断された人々は内戦の敵とは限らず、多くは部族や宗教が違うというだけで敵と見做された人たちで、その中には罪のない一般市民や女性も多く含まれている。

内戦はもともと脆弱だったアフリカの雌ライオンの活力を削ぎ、ただちに休養を必要としていた。しかし、思いもよらず数年後、内戦の傷が癒えないシエラレオーネで二〇一四年五月、エボラ出血熱が発生した。もともと貧しかったこの国は地獄に突き落とされた。しかしこの災難が、シエラレオーネ共和国という名を

一躍世界に知らしめることになった。

エボラ出血熱が発生し

国力が一層衰える

研究によると、エボラ出血熱ウイルスの元凶とされるオオコウモリは、本来九十種類以上のウイルスを持っていると言われる。オオコウモリはアフリカの部族にとっては主要な食糧源の一つであり、そのほかに鼠や猿も食用されている。今回のエボラ出血熱の発生は、二〇一三年十二月に隣国ギニアの子供が両国の国境付近でエボラ出血熱ウイルスを持った

オオコウモリを捕獲した時に、感染したことが原因とされる。伝染病はそこから始まって収拾不可能になり、全国に広がった。

シエラレオーネの医療体制はもともと不十分で、公共衛生観念が不足していた。伝染病が発生しても、国に問題を解決する力はなく、WHOと多くの国の人道医療団体に頼るしかなかった。キューバや韓国、カナダ、アメリカ、ドイツ、フランスの国境のない医療団体の支援でやっと、エボラ出血熱の感染拡大を押さえ込むことができた。

二〇一六年三月十七日、WHOはシ



エラレオーネのエボラ出血熱緊急事態を解除した。統計によると、二〇一四年五月に感染が確認されてから、シエラレオーネ国内で感染した人の数は一万四千二百二十四人に達し、三千九百五十六人が亡くなった。それが収まっても、西

内戦の被害者

ニュートン地区に住むこの足を切断された女性は内戦の被害者である。アフリカでは昔から部族間の戦いで勝った方が敵の手や片足または両足を切断して威嚇する習慣がある。内戦中かなりの数の人が手足を切断されており、罪のない一般市民も多く犠牲になっている。

シエラシオーネ

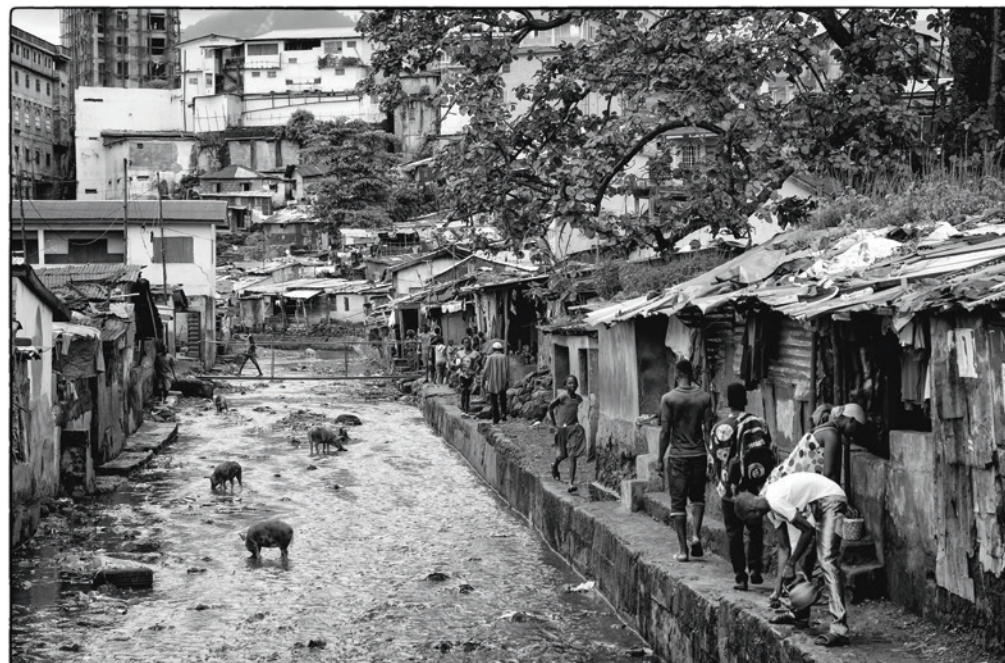
●地区は狭く、娯楽に欠け、子供は空き缶を叩いて遊んでいた。



●スラム街の簡単な小商い。



●子豚が蓋のない排水溝で食べ物を漁っていた。人と家畜が共生しており、現地の人はそれを普通に思っている。



■ クルーベイスラム街

クルーベイのスラム街はフリータウンの海辺沿いにあり、約6万人が住んでいる。その面積はサッカー場2、3個分の広さで、各家に水道は引かれておらず、公共の蛇口を使うしかない。また、電気も合法的には敷かれておらず、電気は各自でどうにかしなくてはならない。そこは湿っぽくて蒸し暑く、風通しが悪い。人口が密集し、衛生環境が劣悪なので、疫病を防ぎきれない。一旦伝染病が発生すれば、収拾不可能になる。エボラ出血熱の大流行はその一例である。

アフリカの雌ライオンは息も絶え絶えになり、国際支援が待たれる。

話はここで終わらない。エボラ出血熱が勃発した頃、台湾の慈済基金会はシエラレオーネの状況に気づき、支援する方法を探っていた。

シエラレオーネ出身のステイブン・フォンバ師兄の伝を頼って、慈済は現地の慈善団体、カリタスフリータウン基金会 (Caritas Freetown Foundation) とヒーリー国際災害支援基金会 (Healey International Relief Foundation、略してHIRF) と共同で支援する覚え書きに調印した。

た。そして、現地及び外国の医療団体や慈善団体を訪問した。互いに団体の理念を理解することで協力する機会を見つけ、シエラレオーネが直面している難題の解決に力を尽くすことを願った。

昨年、慈済は台湾農協が提供した二百トンの白米を同国に寄贈した。ヒーリー基金会とカリタス基金会、ラニー基金会 (Lanyi Foundation) は共同で配付活動での移動経路の決定や交通整理、米の運搬、対象世帯の名簿作成などを手伝った。九月二十七日、三回目に到着した白米六十トンの配付が行われた。

配付活動の式典はフリータウンのニュ

互いの協力の下、慈済は二〇一五年三月に物資の支援を初めて同国で行った。当時は伝染病がまだ流行っていたため、慈済からの支援物資はステイブンが代表で現地の協力者を通して配付した。

二〇一六年三月、WHOはシエラレオーネでのエボラ出血熱の終息を宣言した。四月、慈済は二回目のケアと配付活動を行った。

二〇一六年九月下旬、慈済ボランティア一行七人がアメリカと台湾からヨーロッパを経由してシエラレオーネに到着し、現地の協力者とフリータウンで一週間に及ぶ米の配付とケア活動を展開し



●5月から11月はシエラレオーネの雨季。9月に配付活動した時はその真ただ中で、大雨で砂利道がぬかるみ、配付物資を積んだトラックが立ち往生したため、予定が大幅に乱れたこともある。



ートン地区で行われた。ニュートン地区は内戦時に手足を切断された二十世帯の人と百五十人を超える住民が住んでいるが、政府は被害者に何らの救援措置も取っていない。百三十九袋の白米は一袋十キロで、トラックでニュートン地区に運ばれ、二十一人の現地ボランティアが配付役を受け持った。慈済ボランティアは現地ボランティアに感謝した。

ニュートン地区での配付活動は円満に終了し、全ての団体は東の町ボーに移動した。彼らはホテルに着く前に「コミットアンドアクト基金会 (Commit and Act Foundation)」を訪れた。その基金会の

主な活動は虐待を受けた子供や女性のケアであり、基金会自体、慈済が支援する団体の一つでもある。

九月二十八日朝、ボーから東部の町コインドゥに向けて出発した。出発して間もなく、様々な困難が待ち受けていた。白米を積んだトラックのタイヤがパンクしたため、百八十袋の白米を人に乗せた三台の車に分けて積み替えてから再度出発した。道中十七キロに渡って泥の山道だったが、午後三時にやっとコインドゥ地区に到着した。そこはシエラレオーネでのエボラ出血熱発生地の地である。

皆、時間を無駄にすることなく、協力



●ニュートン地区で配付活動を行い、民衆は喜びと共に白米を受け取った。この地区には内戦で手足を切断された人約150人が定住している。エボラ孤児も収容しているが、政府の支援は不足している。

●(左) 内戦で腕を切断された貧しい人が笑顔で米を受け取り、地域ボランティアと感謝し合った。



●コインドウで配付する前に記念撮影をした。コインドウはシエラレオーネのエボラ出血熱発生の地で、状況は熾烈を極めた。慈済はエボラ出血熱感染が落ち着いた後に米を配付した唯一の外国の団体である。

して白米を車から下ろし、青色のビニールシートにきれいに並べた。配付が始まる前、「慈済はエボラ出血熱が収まった後、コインドウ地区に来て白米を配付してくれた唯一の団体です」と村長が談話を述べた。

人道支援は先人に続く

コインドウ地区では五十四世帯がエボ

ラ出血熱に感染したが、幸いに生き延びたほか、四十数人のエボラ孤児がここに定住している。慈済は百七十一袋の白米を配付した。

急場を凌ぐだけのわずかな白米を配付するために、遙か遠い国に出かける意味があるのかと疑問に思う人もいるはずである。それに答える前にこれからお話をすることを聞いて、参考にしてもらいたい。

シエラレオーネでエボラ出血熱が猛威をふるっていた時、少なからぬ国内外の医療人員が世界の医療史上でも最も熾烈を極める伝染病との戦いに参入した。二年後、伝染病は抑えられたが、この世紀

の伝染病は三千九百五十六人の命を奪った。その中には一般市民のほか、優秀な医療人員や外国から支援しに来た人員も含まれている。

これら犠牲となった人材は、もとはシエラレオーネから遠く離れた場所に暮らし、この戦いに命をかけて参加する必要はなかったのに、異郷で命を落としてしまった。何のために？ その行動に意味があるのか？ 私が彼らに代わって答えることはできない。しかし、彼らが恨みも悔いもなく、この伝染病との戦いに身を投じたことを知って、ある道理を理解した。医療従事者として感染地域は戦場

であり、自分の能力を発揮して貢献できる檜舞台でもある。例え、不幸にして命を落としても医者としての本望だったに違いない。

エボラ出血熱がもたらした後遺症を直接見ることがない人や、シエラレオーネから遠く離れて伝染病の状況に特別に注意を払っていなかった人が、これら医療人員の奉仕と犠牲の意義を語るのはとても難しい。

進んで戦いに身を投じた彼らは、人間が持つて生まれた人道精神を私たちに見せてくれた。このような人間の本質は、災害が起きた時に突出するものである。

国際的な人道支援団体やNGOが出現する。慈済はそのうちの一つに過ぎない。

慈済の人道支援はほとんどが一過性のものではなく、長期的に続けられるものである。シエラレオーネでの人道支援とケアもこの方式に則っている。状況が許す限り、慈済の足跡は必ず、再び西アフリカに出現するはずである。一週間の配付活動の間に皆で現地の慈善団体を訪問し、意見交換を行った理由がここにある。また、これらの交流を通して互いの経験を学び取り、情報交換することで、将来のケアや支援活動に役立てようとするものである。

エボラ出血熱に関する知識

エボラ出血熱は急性の重い疾患で、主にコウモリを媒介とする。病原体を持った野生動物と接触して感染する。多くの症例はアフリカで見られる。人と人の感染は直接接触で起る。患者や遺体の血液、唾液、嘔吐物、排泄物、汚水、涙などである。症状は、高熱、倦怠感、頭痛、嘔吐、下痢及び出血などで、致死率は五割に達する。エボラ熱に対して、現段階では予防する有効なワクチンはなく、感染してから対処療法で治療するしかない。

西アフリカのシエラレオーネ共和国とリベリア、ギニアの3カ国では2013年末にエボラ出血熱が大流行し、28600人が感染したが、シエラレオーネがその半数を占めた。2015年11月に一度、エボラ出血熱感染危険区域から名前が外れたが、その後、再び新しい症例が発見され、今年の3月に至ってやっと、WHOと当国政府がエボラ出血熱流行の終結を宣言した。統計によると、3カ国で11300人がエボラ出血熱で亡くなった。

配付と訪問活動を終えた後、慈済ボランティアは各自多くの資料を抱えて所属する国に帰って、シエラレオーネでの配付とケアの成果を報告し、次回の活動に最適の時期と場所を決めるために資料を研究した。

そんな時、今度はハリケーン・マシューがカリブ海の島々を襲い、六百人以上の行方不明者と死者を出した。シエラレオーネから戻ったばかりのアメリカ慈済ボランティアはただちにハイチに向かい、新たな人道支援活動を展開した。



◎文・林孟荻（大林慈濟病院栄養士）
訳・葉美娥 撮影・黄筱哲

カルシウムで骨密度を高めよう

日常生活の中のどのような習慣が、骨粗そう症になりやすくするのですか。

どのようにすれば、カルシウムを十分にとり蓄えることができるのでしょうか。

栄養士がその秘訣を伝授します。良い食材を選んで骨密度を上げましょう。

会社で長時間座りっぱなしの蕭さんは、体が小さく、毎日朝早く出て夜遅くに帰ります。いつも夜の七時から八時まで残業をし、眠気覚ましに一日一、二杯のコーヒーが欠かせません。休日になれば、当然遅くまで寝て、それから仲の良い友人たちと一緒にレストランで美味しい料理を味わってゆっくり過ごします。

李おばあちゃんは、膝の関節痛が発症して以来、動作が遅くなって、だんだん友達と山登りや運動をしなくなりました。毎日家において、部屋の掃除や食事の支度、またはテレビばかり見えています。

ご存知でしょうか。この二つのお話の主人公である二人ともが、骨粗そう症のハイリスクグループに入っているのです。賢い読者はストーリーの背後に隠れている危険な病気に気づいたかもしれません。





骨粗そう症のハイリスクグループ

性別と体型：女性、特に閉経後の小柄な体型の人。

生活習慣：喫煙、過度な飲酒、カフェインを多く含む飲料、家に閉じこもって運動しない人、カルシウムを多く含む食物の摂取が不足している、日差しを避けすぎまたは適度に日光を浴びない。

薬物：長期にアルミニウムの胃薬（制酸剤）、ステロイドを服用している人。

成人が一日に必要なとするカルシウムの望ましい摂取量は、千ミリグラムとされています。二〇一三年の調べによれば、生後二カ月から六歳までの子供は、カルシウムの摂取がほぼ足りている状態ですが、七歳以上の各年齢層では実

に九割以上がカルシウムの摂取が不足していることが分かります。

カルシウムの摂取が不足すれば、小児期や青年期は骨の成長が不良となり、成人や年配者は骨粗そう症が出てきて、万が一転んだら、骨折しやすくなるのです。

そうならないために、今すぐ生活習慣をチェックし、カルシウム摂取量が不足しないよう心がけましょう。

カフェイン：健康な成人の場合、カフェイン摂取量は一日三百ミリグラム以下が望ましいです。コーヒーを買う際には含まれているカフェインの量の表示を忘れずに確認してください。



炭酸飲料：炭酸飲料に含まれるリンという成分は、腸がカルシウムを吸収するのを妨げてしまうので、注意が必要です。リンは炭酸飲料だけではなく、多くの加工肉食品にも含まれています。たとえばソーセージやハムなどはリン酸塩を含んでおり、これもカルシウムを腸が吸収するのを妨げます。

動物性たんぱく質の過剰摂取：肉類を摂りすぎるのも、カルシウムの流失を引き起こします。

高塩分：世界保健機関（WHO）の資料によれば、塩分の多い食物はカルシウムを流失しやすくなります。ですから、インスタントラーメン、ビスケット類、缶詰などの加工食品の摂取を避けるべきです。加工していない自然な食物を多めに摂取したほうがよいです。

カルシウムを補う三つのポイント

①日光を浴びるのを忘れないでください。

適度な日差しを浴びることは、体内でビタミンDを生成するのに役立ち、カルシウムの吸収を促進してくれます。

②果物も食べましょう。

果物に含まれるビタミンCは、カルシウムの吸収を助けます。

③よく運動しましょう。

運動してこそ骨密度がスカスカになるのを防ぐことができます。

【職人精神】

泉興畳店

文・葉奕緯（經典雜誌原稿編集担当者）
訳・青木芳味
撮影・顔松柏

日本の技を受け継ぎ六十年

日本伝来の技を受け継ぎ畳産業を守り続ける祖父と孫の二人。李金水さんは日本の畳職人岡田さんの下で三年半の指導を受けた後にこの店を開業した。今は若い世代に引き継がれ、孫の李宗勳さんが畳文化の再興を目指している。



「朝のお茶を一杯どうぞ！ 私が夜中の四時に起きて煮出したお茶だよ」。親切な呼び声は、親子二代で経営する紅茶店から聞こえてくる。台南市内の新美街の両側に立ち並ぶ建物は少なくとも三階以上の高さがある。明るい太陽が降り注ぐこの通り、実は海が埋め立てられて陸地となる前は五條港という運河で、海上貿易が盛んに行われていた場所だったのだ。新美街は港に一番近い南北に走る通りで、かつては「帆寮街」と呼ばれ、とてもにぎわっていた。街の一角には淡い灰色の建物がずらりと並び、その片隅に清々しいイグサの香りを放つ一軒の家が

ある。

近くへ行つてのぞいてみると、手首に緑色の「手当て」（三角形の鉄が入った指ぬきのような道具）を巻きつけた一人の職人が底の青い畳床の脇に座り込み、三角形の木の尺を持つてその長さや幅を測っていた。その傍らでは、目つきの鋭い若者が一人、汗で髪をびっしょりにさせ、息を切らせながら畳をトラックに運び込んでいる。戸口では、もみ上げもすっかり銀色に染まった九十歳ほどの老人が、白いプラスチックの椅子に腰かけ、細く長く続く新美街の通りを深い眼差しで眺めている。ここは一九二〇年代に開

業した老舗の畳店で、この職人はこの店のベテランの畳職人。老人はかつて日本教育を受けたことのある李金水さんで、泉興畳店の創業者でもあり、国宝級の畳職人でもある。そして若者は現在台湾最年少の畳職人、李宗勲さんで、李金水さんの孫にあたる。

日本統治時代、台南は米や砂糖などの産物が豊富に採れて輸出が非常に盛んに行われ、日本人に重視されていたため、古い建物の多くに日本風の間取りが見られる。通常、建物を建設する際にはあらかじめ畳何畳分といった大きさでの設計がなされ（「一畳」のサイズは九十センチ

チ×百八十センチ）、畳は長方形や正方形に敷かれることが多かった。伝統的な居間の広さは五畳半、茶室と和室は約四畳半となっている。「畳」という漢字は日本語で「たたみ」と読み、それを音訳して「榻榻米」という字が当てられた。畳は客人に寝たり坐ったりする空間を提供する家具の一つでもあり、日本ではよく畳の枚数が部屋の広さを表す単位として用いられている。

日本の技を初めて伝授

一九二六年生まれの李金水さんは日本



●手仕事で畳を製造する業者は台湾全土でもわずか3軒しか残っていない。木製の三角定規で寸法を取る熟練の職人が、三代にわたる伝統の技を今に伝える（左図）。畳には厚さ25センチを5センチに圧縮した良質の材料を用いている。



教育を受けて育ったが、小学校しか卒業していなかったため、日本からやって来た畳職人、岡田さんの下で畳作りを学ぶ決意をした。しかしちょうど第二次世界大戦終結の時期と重なり、岡田さんは李金水さんへの指導を終えたと間もなく台湾を離れることになる。李金水さんは当時二十歳。計三年六カ月の修業の後に一人前の職人となった。

李金水さんは初めの頃は高雄へ行き、人に雇われる形で働いていたが、三十歳を過ぎてから新美街に戻り、自分の店を開業した。毎日朝八時から夕方まで働き、一カ月あたり優に六、七千元は稼い

だ。当時の警備員の月給が二十元程度だったことから考えると、その時代の畳は贅沢品で、非常に収入の高い仕事であったと言える。泉興畳店は砂糖工場から政府機関、警察官宿舎、嘉南大圳に至るまで、ありとあらゆる所からの注文を受け、事業はうなぎ登りに成長した。しかし近年高層マンションが林立し、畳がマットレスに取って代わられるようになると、市場は次第に収縮、衰退していき、かつては台南だけでも十一軒以上あった畳店が、今では手仕事を頑なに守り続ける畳店は台湾全土でもわずか三軒のみとなっている。畳職人の年齢もほとんどが七、

八十歳代で、若い弟子たちは次々と転業し、畳業界では高齢化が進んでいる。

李金水さんはこの七十年間で少なくとも十万枚以上の畳を売っており、自分がこの仕事にこだわりを持ちながら一生続けてくることができたのは、一番最初に日本人の師匠に師事して学んだ経験があったから、そして次第に畳に対する愛着が湧き、畳を単なる商品としてではなく一つ一つの作品として見るようになったからだと語る。そんな彼も、八十歳を超えると体に支障をきたすようになり、事故が原因で右足を手術し金属ボルトを入れたことから、ついに技と事業を孫の手

に譲り渡す決意をしたのである。

李金水さんの四人の子供たちは皆それぞれに志があり、父親の仕事を引き継ぐ者が一人もいなかった。そのため、商機に湧く中国福建省での学業を終えて帰国し、就職活動を始めただけの孫・李宗勲さんが、家族が賛否両論で二分する中、泉興畳店の後継ぎとなることが決まったのである。現在二十八歳の李宗勲さんは、かつて中国にいた時にはお洒落な貴公子だった。商売に従事する家族と共に様々な大きな局面に遭遇したこともあり、豪快でさっぱりした性格から多くの商業界の著名人を友人に持っている。一九九九

年、中国のサラリーマンの平均月収が六百人人民元であったころ、毎月一萬元以上もの小遣いを使う人間は「萬元戸」と呼ばれ、李宗勲氏もその中の一人だった。

しかし彼は祖父李金水さんのプロ精神に尊敬の念を抱いている。祖父は「職人」とは何かを知らないが、彼がたびたび口にする「技の人」に必要とされる規則正しい生き方は、まさに職人の精神と根本で深く繋がっていると感じた。李宗勲さんは祖父の厳しい手ほどきの下、毎晩早い時間に就寝し、早朝五時に起きて仕事をした。「こうするんだ。やってみろ！俺は一度しかやって見せないぞ」。

畳の製造



1. 寸法を定め、端の余分な部分を切り落とす。



2. 畳表を被せたら待ち針で固定し、縫い上げていく。



3. 畳縁の絵柄を選定し、縁引き針で四つ角に固定しながら縫い付ける。



4. 閉め鉤で糸を締め、四つ角の縫い合わせ部分を強化する。

基準となるマニュアルは存在せず、あるのはただ祖父の経験と繰り返される叱咤のみ。李宗勲さんは修行の間、何百回も刺し針を手に刺し、毎日畳の前にしゃがみ込んで作業するため足腰は痛み、かつての華々しい生活から遠く離れた寂しさや物足りなさに耐え続けた。そして三年六カ月におよぶ辛い修行の末、ついに一人前の職人として認められ、店を任せられるようになったのである。李金水さんはその時すでにかなりの高齢に達しており、九十歳に差しかかろうとしていた。私たちが取材に訪れた時は、すでに引退してから十年近くが経っていた。

現代における畳の製造工程

李宗勲さんは次のように語る。「祖父の教え方は、順を追って徐々に極めていく日本伝統の修行法『守・破・離』に則っています。師匠が弟子と同じ時と空間を共有しながら一步一步自分の経験を伝授し、職人として必要とされる全ての知識を習得させます。それから自分の考えを取り入れていくことが許され、一つのやり方にとらわれず発展させていくことを学び、そして最後に師匠が伝授した技を完全に自分のものにした上で、独自の新しいものを生み出し、それを確立して

こそ、ようやく一人前になるのです。木工職人として五十年以上の経歴を持つ日本の秋山利輝氏も、その著書『一流を育てる、秋山木工の「職人心得」』の中で、「いわゆる守・破・離とは、師弟関係を基礎として一流になるための路である」と語っている。

畳一畳の重さは約二十五から三十キログラムあり、畳は三つの構造に分けられる。一番下の層は防虫のためのクラフト紙で、破れ防止のビニールシートを一層プラスしており、中間の層は

藁でできた畳床。そして一番上にイグサでできた畳表を被せ、両側を織布で包むように縫い合わせている。布の表面には日本の伝統的な柄があらわれており、畳縁と呼ばれる。現在、泉興畳店では畳床や畳表などの半製品をそれぞれ別々のメーカーから買い入れ、店で畳に加工しているが、通常の規格の畳を一枚作るのに少なくとも九十分の時間を要する。まず李宗勲さんが仕入れた畳床を店内に運び込み、四辺の不要な部分を切り落とし、指定された形に裁断した後、顧客の指定した材質の畳表を被せて両端をリボンのような形状をした畳縁で包み込み、最後



●日に日に磨り減っていく畳包丁が、職人の手仕事へのこだわりを象徴している。縁引き針を収納する木箱や畳の縁を定めるに用いる。渡などの道具は先代から二代にわたって受け継がれている。

にナイロンの糸で畳床・畳表・畳縁の三つをしつかりと締め合わせたら完成となる。

李宗勲さんが最も難しいと感じるのは採寸である。数と大きさがぴつたりと合った畳を製造するためには、巻き尺と木製の三角定規を持つて顧客の住まいへ行き、スペースの広さを計測しなければならない。また、畳の製造方法は二つの流派に分けることができる。一つは泉興畳店が採用している文成派。もう一つは武成派である。文成派は職人を顧客の家に派遣して採寸を行い、必要とされる正確な寸法をその場で紙の上に書き記し、店

に戻って製品を完成させた後、畳を顧客の家に届けて作業が終了となる。一方、武成派は、職人が現場に行って採寸しながら同時に畳を製造し、一度足を運んだだけで製品を完成させるというものであるが、この方法を採用している業者は比較的に少ない。

職人の心得と技を会得し 新たな形を創り出す

李宗勲さんはこの伝統工芸に対して、最終的には畳という文化を再生させたいという願いを抱いている。現在手仕事で

製造する畳店が台湾でわずか三軒のみとなっている状況において、いかに畳製造の機械化の誘惑に打ち勝つかが職人たちの一つの大きな課題である。しかし李宗勲さんは自身の得意分野からその答えを見つけ出した。

顧客グループの点について言えば、李宗水さんの時代の顧客は台南市だけに限られており、畳を顧客の家まで郵送するという方法を取っていたが、李宗勲さんはこれまでのやり方を改め、自らが車を運転して顧客の家へ赴き、計測も搬入も一手に引き受けることにした。また、ホームページを立ち上げて新たな顧客グル

ープへのサービスを開始したり、各メディアによって盛んに報道されたりしたこともあって、泉興畳店の顧客は多様化し、ロシア、イギリス、カナダなど海外からの注文も数多く受けるようになった。李宗勲さんはまたこれまでに、畳表の種類による違いや手入れのしかたについてしきりに尋ねてくる客や、部屋の形に合わせて半円形の畳を作ってほしい、あるいは収納が可能な畳を作ってほしいと要望する客など、要求の高い顧客にも遭遇してきたが、前例がない場合、自分自身が努力して模索し勉強するより仕方がない。そんな中で知恵を絞って顧客の指定

した規格の製品を完成させ、顧客に心から感謝された時に感じる、困難を克服した達成感とやりがい、彼が頑張っていると思う原動力の一つとなっている。

日本では昔、円形の畳はしばしば座禅用に、長方形の畳は接客用に使われていた。畳敷きにした場合にかかる費用は、同じ大きさの部屋で洋風の床にした場合の約三分の一で、ソファを置かない分スペースの節約にもなるし、畳から発せられる天然のイグサの香りは精神を安定させる効果があるほか、睡眠の質を高めたり湿気を吸収したりする効果もあり、

自動車の排気ガスや産業排気ガスから生じる空気中の二酸化炭素を浄化する働きもある。また、畳表の目がつまった品質の良いものほど防水性が優れ、防ダニ効果も高く、手入れも日光に当てるだけで済む。李宗勲さんは顧客の家を訪問する際、商品を搬入しながら必ず顧客に対して畳の機能と手入れの仕方についての説明も行う。

客先を訪問して採寸したり商品を搬入したりするほか、仕入れ・倉庫管理・材料準備などの会計業務や、注文問合せやアフターサービスなども全て、李宗勲さんが一人で担っている。今では注文数が

祖父の時代の五倍にもなっているため、仕事の電話が絶え間なく鳴り響き、睡眠時間は急速に圧迫されている。空き時間にトラックの中で仮眠をとることによってなんとか体力を維持している。しかしながら、李金水さんはたびたび孫を叱ってこう言う。「この怠け者が。毎日十時にならないと起きてこない」。徹夜して夜遅くまで仕事をする習慣がついており、いつも日が高く昇ってから起きて来る李宗勲さんは、祖父の目には失格者と映るのだ。しかしこれはただ口で言っているだけに過ぎず、実は自分の血を分けた家族がこうして同じ道を歩んでくれて



●雲林県的李福義工場では、くくり上げた藁を屋外に置いて1年間日に晒し殺菌した後、畳の主原料として用いる。



●台湾全土の畳床の需要の約4割が、この小さなトタン作りの工場でまかなわれている。

いる姿を晩年になって見られることに、とても感動しているのである。

泉興畳店の畳床は、現在雲林の李福義工場のものを使用している。この工場の畳床は稲藁を原料としており、各地から集めた藁を一年間日干しして殺菌した後、父の代から使用している大型機械設備を用いて二十五センチの厚さの藁をわか五センチの厚さになるまで圧縮し、半製品の畳床とする。底部にクラフト紙を貼った青い底の畳床は湿気や破れを防止する役目がある。

ここでぜひ触れておきたいのは、伝統的な畳床を生産するこの工場もまた、人

材不足に困窮しているということだ。一本の生産ラインには本来少なくとも八人が必要なのであるが、現在社長と社長夫人と熟練の職人一名のわずか三人で切り盛りしながら、全国の需要の三分の一の畳床を提供しているのだ。社長の李福義さんもまた父の代から受け継いだ二代目で、仕事内容は異なるが共通する点が多くある。しかも両者とも人材不足の問題に直面しており、もしも将来後継者が現れなかったら、事業は存続の危機に立たされることになるのである。また、李福義さんの兄も雲林で機械を利用して畳表を製造し、台湾各地に販売している。

●李宗勲さんは工房で畳教室を開き、民衆に畳の縫製技術や材質の違いについて教えている（熱情海産粥提供）。



「熱情海産粥」が地域再生に協力

二〇一五年の夏、新美街に暮らし、この町の不思議な魅力に憑りつかれた学生たちが、古い街並みの再興を助けるために「熱情海産粥」というプロジェクトチームを結成し、SNSで三十万台湾元の活動開始資金を集めた。彼らは畳という文化を保存すること、クリエイティブな商品を開発して畳文化に新風を吹き込み新たな発展を引き起こすこと、そして新美街地域の町興しに尽力することを目的に活動している。彼らの専門は文系からデザイン学科まで多岐に渡っており、泉



●建物の内部一面に畳が敷き詰められた80年以上の歴史を有する「青田七六」は、市の古跡に指定されている。建設当時の姿をほぼ完全に留めた日本式の建築物である。

興畳店は彼らと共に畳でポストカードやコースターやカメラケースを製作している。熱情海産粥は工房を開いて人々に畳の製造過程を紹介したり、畳職人の仕事の技を後世に残すための記録フィルム撮影を行った

りしている。この熱情海産粥というグループの中には、まだ就学中の者もいれば、とっくに社会人になって働いている者もいる。彼らは皆伝統文化を再活性化させることを己の務めとしており、自分が学んできたことを活用して老舗店のマーケティングへの協力や、老舗店の新たな一面を切り開くなどの取り組みを行っている。

日本人の畳職人からその技を受け継いだ初代の李金水さんは六十年前に新美街と解くことのできない固い縁を結び、さらに雲林県荊桐郷の二代目畳床職人の李福義さんとの協力を開始した。現在は若

い次の世代へとバトンが手渡され、台湾最年少の畳職人、李宗勳さんが畳文化の再興を目指している。

李宗勳さんにはもう一つの夢がある。それは、日本が発行する畳技能士資格に台湾人として初めて合格することだ。「真面目さと慎重さとこだわりは、祖父から受け継いだ職人精神です」と語る彼は、一つ一つの工芸作品を介して広まってゆく評判によって、手仕事による畳の伝統の「技」と「記憶」を守り続けている。

(経典雑誌220期より)



【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・林淑女

いかなる逆風に対しても
感謝の気持ちで向き合
う

順調だからといって安穩とせず

逆境に遭遇しても志を失わず

感謝の心で逆風を受け止めるなら

逆境は「増上縁」になる

バルカン半島にあるセルビアは、中東の難民がヨーロッパに向かう際の重要な通り道で、この頃の季節はちょうど厳冬でした。難民は長い道のりを歩いてきて力尽き、持ち物もほとんど使い果たしていました。彼らが凍りついた雪の上で冷たいパンをかじっていた

り、子供たちが半袖姿でいるのは、見るに忍びない光景でした。

九カ国から集まってきた三十八人の慈済ボランティアは、二〇一六年の十二月上旬現地に集合して、四千人以上の難民に寒さをしのぐための外套と帽子を送りました。また中東の人たちが好むトマト風味のインスタントご飯を、数々の難題を乗り越えて空輸し、栄養の足しにしてみました。

国家動乱のため余儀なく故郷から逃れた人々は、たとえ豊かな人であっても難民となれば、すべてを失ってしまいます。彼らは逃げる道中、至る所で

入国を拒否され、前に進むことも後戻りすることもできません。疲労困憊し、悲しみや恨みに打ちのめされた心中を想像できるでしょうか。慈済ボランティアは心から彼らを尊重して帽子を被せてあげ、コートを羽織らしてあげました。彼らが苦しみに満ちた世の中にも愛の温かさのあることを感じてほしいと願いました。

ヨルダン国境の砂漠地帯では、大型難民キャンプに数万人を収容していますが、非常に混雑して物資も欠乏しています。焼けつくような太陽のもとでテント内はとても暑くなり、雨が降れ

ば全身濡れて、テントの外も中もぬかるみになります。長期にわたって劣悪な環境で生活してきた難民の身も心も崩れそうになっている時、ヨルダン慈済人の救済活動は以前にも増して困難になっていました。

広大な難民キャンプでは全体の世話に手が回らず、一区域の配付が終わればまた大勢の人が待ちかねています。しかしボランティアの人力と資源には限りがあり、身の安全のためキャンプから撤退せざるを得ませんでした。

シリアの女の子レータは産まれる時に空襲に遭いました。病院の分娩室は

混乱し、彼女の足が三ヶ所に傷をつけられてしまいました。難を逃れている途中で、慈善組織の援助による手術を受けましたが成功しませんでした。ヨルダンへたどり着いた時、現地の慈済ボランティア、陳秋華さんの世話で医師の治療を受けて、今ではリハビリを始めています。

一年近い付き合いでレータはすっかりボランティアになつき、ボランティアを見ると喜んで抱きついてきます。難民キャンプの中ではレータのように、治療を受けなくてはならない子供が三百人以上います。

難民キャンプでの配付活動の遂行が困難になっているのを受け、陳秋華さんはしばらくの間物資の配付をやめて、医療方面の救済に専念することを考慮していたその夜、法師が彼の夢の中に出てきて、「私は自分の血を難民に捧げたい」とおっしゃいました。彼はすぐに台湾へ帰って来て、法師にお会いし、「難民に対するケアは必ず続けます」と言って、懺悔しました。

戦地に生を受けた者の命は蟻のように儚いものです。長期にわたり異国の砂漠のテントで暮らす心身の苦勞、明日をも知れない我が身の難民たちを思

うと心が痛みます。苦難の多い世の中はいつになったら終わるのでしょうか？ 時には無力感に打ちひしがれることもあります。しかし衆生の苦難を見ると忍びなく、どんな困難であつても私たちは見放すことはできません。

平穏な気候、平和な環境で生活する私たちは、なんと幸せなことでしょう。奉仕すると発心立願を立てられる人は、さらに幸せな人です。慈済教育志業では「里親」行動を起こして、心ある人たちが、ヨルダンにいる一人でも多くの子供たちが幸せになるよう願っています。

済委員と慈誠隊員（男性ボランティア）になりました。彼らは見習いから訓練まで少なくとも三年の期間が必要で、種々の困難を克服して目的を達成したのです。

中国のハルビン市、黒河市のボランティアは訓練に参加するため、毎月千八百キロ離れた北京へ、片道だけでも二日間かかる列車に乗って出かけます。彼らは狭い列車の中で、聴いた仏法を互いに語り合って時間を大切に過ごしていました。

大陸の東北地方は寒さが厳しく、それでも彼らは早朝の「晨鐘起、薫法香

人心に調和がないと、苦難は尽きません。幸せを感じて感謝し、さらに敬虔になって、平安を大切に、社会が平和になるように守らなければなりません。さらに愛の力を発揮して人心を動かすのです。人心が調和すれば、この世の生態を変えることができるのです。

定力の鍛錬は試練に耐えられる環境の動揺を受けなければ
菩薩道は成就することができる

今年は二千人以上の海外現地ボランティアが、台湾へ認証を受けにきて慈

（早朝の説法）を堅持していました。風雪の中、全身を防寒具に包んで、家を出るとあたり一面は白一色の深い雪に包まれています。説法を聴き終わるとお互いに、「今日も私たちは一言漏らさずに聴いた」と話し合っている友たちの精進に感動しています。

修行とは、自分の道心を守ることです。菩薩道を選択したからにはすべての試練に耐え、劣悪な環境にあつても道心を堅く持ち、一步一步前に向かって進むのです。

鉄は燃え盛る火をくぐって利器になります。人も同じく「天の試練を受け

て強い人間」になります。逆境にあっても感謝の心、喜びの心で逆風をすなおに受け止めると、大慈無悔、大悲無怨、大喜無憂、大捨無求という、何物も求めない慈悲の心で励むことができます。怨みも悔いもなく、憂いもなく何も求めず、逆境をも「増上縁」に成せば、道心と道業が増します。

リハビリのように、痛みをこらえて続けると筋肉と骨の機能が回復します。菩薩道を歩むのも鍛錬が必要です。どんなに多くの悪い出来事や逆境に遭っても怨みも憎しみもなく、愛を失わずに堅持して尽くすことです。反対に心

に起伏があると、長い道を歩くことができません。自分が置かれた環境に甘んじて過ごし、智慧が足りないとい是非を見分けることができず、落とし穴にはまって善道から離脱してしまいます。

大勢の中でいろいろな人、事、物の試練に対しては、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧という六種の法が必要になります。

「布施」とは物資の布施だけでなく、食欲、煩惱をなくすことによって、とらわれをなくすことができるのです。逆と悪に虐げられた時は、牙を剥いてやり返さずに、それを甘んじて受け、

善に解釈して、心身の過ちを起こさないことが、忍辱と持戒です。すでに発心したからには、決して志半ばで立ち止まったり、やめてしまわないことが精進です。順調や逆風に動揺されないことが禅定です。この五項目をやり遂げると、充分に智慧が具わったということ、で、煩惱の岸から涅槃の彼岸に到達できます。

大智者は、苦楽の中でも自在で何のさし障りもありません。順境の中にあっても名利や地位の誘惑を受けず、楽にも迷わなければ、逆境にあっても修行の意志は喪失しません。順境、逆

境であろうが、すべては悟りの糧になります。

努め励んで奉仕すること

よいことをすれば

潜在能力になる

初心を永久に

方向は偏らずに

台南の善化に住む王秀桜さんは数年前、自動車事故によって昏睡状態に陥りました。彼女が昏睡状態の中で見たのは、自分が霊安室に送られていて、法師が遠くから手招きしながら、「ここ

へ来なさい。あなたの仕事はまだ終わっていないですよ」とおっしゃっていました。それからだんだん意識が回復してさらに不思議なことに、今まで台湾語しか話さなかったのが、最初に話した言葉が北京語でした。娘はこれが本当に自分の母かと疑ったほどでした。

自動車事故によって記憶力を損なった秀桜の以前は健忘症でした。しかし慈済の一粒の種子である彼女は、八識田の中の環境保全という潜在能力がいきいきと続いていたのです。皆も普段から良いことをして、八識田の中に深

く入り、生々世々にわたって続けられることを願っています。

●
《法華經・提婆達多品》に記載されている話です。

ある国王が法を求めるために王位を放棄し、広く大乘法を理解している師を国の中に探し求め、その人の奴隸となって終生尽くしたいと願っていました。

ある時仙人が宮殿へやって来て、国王の使いを受けて《法華經》の伝授に

来たのだと言いました。それからの国王は毎日、果物を採り水を汲み、薪を拾って食事を作り仙人をもてなしました。その上、身を屈め背中に重い物をおいて椅子をこさえ、仙人を休ませていました。

こうして国王は仙人に尽くし、時が千年を経ても、仙人は法を伝えようとしません。しかし国王は相変わらず、慇懃に法を求め一刻もおろそかにしませんでした。その後、国王は「私は提婆達多の善知識があったので、私の六波羅密と慈悲喜捨が十分に整った」と言いました。

貴い王はありとあらゆる物を持っています。しかしこの国王は貪欲なく、うやうやしく師を奉じて、さまざまな試練を受けても、心は平静を保っていたので、いつの間にか自分が求めている「人としてやってはいけない、また忍ばねばならない」法を求めることができたのです。

その国王とは釈迦牟尼仏のことで、仙人は提婆達多でした。どんなに提婆達多が生々世々に亘って仏陀を困らせても、仏陀の修行には差し障りがなく、感謝の心をもっていかに辛い目にあっても、六度と慈悲喜捨の無量心を培っ

ていました。

凡夫の発願は一旦、窮地に遭うと退きます。しかし仏陀の志は堅く、どんなに長い時を経ても最初の信念を失わなかったことは、堅い妙法、菩薩道、広く衆生に済度する追及心があったためでした。

生活する中で人、事に対して信念が動揺するのも修行で、一瞬一瞬を把握して、菩薩道に精進すると慧命が成長します。



命を大切にするには
体を大事にし過ぎず

手足を使つて奉仕すること

鹿港の慈済リサイクルセンターに「六輪の花」と言われる六人の女性ボランティアがいます。六人の年を合わせるとうと五百歳近くなります。七十九歳から九十二歳の彼女たちは、体に痛みがあつても心は健康で、毎日良能を発揮しています。

年長者の施呂秀鳳さんは毎日道具を持参して、リサイクルセンターへやってくるペットボトルのふたをわずか

一秒で切り取っています。糖尿病を患っているため、嫁が毎朝血糖値をチェックしてインシュリンの注射をしてから回収所へきます。車椅子で来る途中は、回収できる物があると拾って車椅子に載せ、自分はそれを推して来ます。

「もしも何もすることがないとぶらぶらしてつまらないけれど、回収物の分類をしていると楽しく、健康にもいいですよ」と言っています。

慈済リサイクルセンターには大勢のお年寄りがいます。このお年寄りたちは活発で多芸多才で、回収した傘の布を外してエプロンなどにリサイクルし

ています。老人が社会問題になっていると誰が言ったのでしょうか。このお年寄りを見て下さい。大地、衆生を大切に、生命価値を善用した尊厳のある生き方をしています。

命の自然の法則である生老病死は、どんな人も避けて通ることはできませんが、慧命は無限です。命は大切ですが、体を大事にし過ぎて何もしないのではなく、手足を動かして奉仕することです。人々が愛のある奉仕をし、社会が愛と善に満ちていると、温かく平穏な世の中になります。

大地の

守護者

蘇玉雲の毎分每秒

◆台南市・蘇玉雲

午後の陽射しが容赦なく照りつけている。猛暑の八月は三十度を超える熱波が襲いかかり、まったくやるせない気分になるというのに、台南の頂美リサイクルセンターには一人、忙しく動き回る人影があつた。たつた今ガラス瓶を運び込んで分類したかと思えば、今度はビニール袋を干し、そのあとは掃き掃除。汗が上着にしみ出しているというのに、休むことはない。

「阿雲さん」と呼ばれているその人こそ蘇玉雲である。体型は百五十センチたらずと小柄だが、仕事をテキパキとこなし、応対も親切。彼女の通うリサイクルセンターをいつ訪れても、まるで働き蟻のように作業をしている。回収物を運んだり、整



理したり、最も頭が下がるのは、毎日午前三時に家を出て回収を始め、夜は七時にやっとリサイクルセンターを後にするということだ。一日のうち四分の三の時間を環境保全の仕事に費やすという勤労精進ぶりなのであった。

十年前、彼女が家庭の問題で苦しんでいた時、夫やボランティアの楊桂花さんの励ましの中で資源回収を手伝うようになり、おかげで少しずつ心を開くようになったという。自分のような人間でもチャンスをつかめば意義



めることとリサイクルセンターの管理である。全く報酬のない、気苦労ばかり多いこの仕事は、あまり好んでやる人はいないが、彼女は自分の意志で引き受け、率先して実行しているのだった。

資源回収車が各地を回って回収物を届けると、そこには袋がごった返す。ボランティア達はそれをさらに細かく分類していく。阿雲さんはボランティア達が毎日気持ちよく作業ができるようにと、作業が一段落した午後に掃除をし、準備を整える。それだけでなく、ボランティアの朝食、おやつ、飲み物なども準備しているのだった。ボランティアの健康と心の両方をケアしたいという気持ちの現れである。このような残業だらけで昇級もボーナスもない仕事に労を惜しまない人が、はたしてこの世にいるとしたら……。そう、それは唯一母親である。玉雲さんは正に母の真心を以て施しを行い、誰よりも早く出勤して、一番最後に引き揚げる人なのだ。

しかし母親として毎日の家事には疲れるときもある。ましてや阿雲さんのように一人でいくつもの仕事を抱えて、一年三百六十五日、お正月にも休みをとらないなら



あることができると分かったのだそう
だ。それからは重いものを運んだこと
や骨粗しょう症も影響して腰がだんだ
ん曲がってしまったが、彼女の中には
強靱な意志がもたらすエネルギーがみ
なぎっている。あの腰の曲がった姿が
「阿雲さん」だ、と今では誰もが分か
っている。

母のように労を惜しまず

今年六十一歳になる阿雲さんは、資
源回収幹事の任について七年になる。
幹事の仕事とは、環境保全の考えを広

台南の頂美リサイクルセンターでは、

仲間がガラス瓶を回収してくれる

て共に行動しただけだが、十分大変であることが分かった。これが彼女の日課なのである。思わず質問せずにはいられなかった。「疲れていませんか?」「台風や雨の日もやるのですか?」。その答えには全く驚かされたものだ。なんと彼女は、「バイクが風で吹き倒されて使えなくなったら、その日は休みます」と答えたのである。



ば、家の階段を上がる気力もない日があつて当然といえる。疲労のため全身がこわばって体が伸ばせない時もあるそうだ。それでも消炎剤の力を借りて仕事を続けるのだという。

深夜から日の出まで

三、四年前、玉雲さんは帰宅途中の道すがら、海鮮料理の店や炭火焼の店、そしてバーやパブなどを観察してみたそうだ。これらの店ではガラス瓶を全く資源回収に出していなかったため、一軒一軒に声をかけたところ回収に応じてくれるようになった。

彼女の一日は二時、三時から始まる。五十CCバイクに乗って家を出るとまだ暗い路地を回って重くかさばるガラス瓶を集めるのだ。しかしバイクに積めるのは一回に一軒分が限度だ。だから一カ所に集めておき、後から資源回収車に来てもらうのだった。深夜から夜が明ける頃まで十何回と往復する。私たちは一度取材に訪れ

に分類を始める。ガラスに陽射しが反射してカラフルな輝きを放つ。まるでボランティアの清らかな心そのもののようだ。ガラス瓶の回収は、利益が低いのでだれもやりたがらないから、結局ゴミとして捨てられることが多い。しかし焼却場で燃え残ったガラスは、焼却炉の寿命を縮めてしまう。実のところ頂美リサイクルセンターでは、一日平均一トンから二トンもの数が集まるが、数にすると四千本近くの瓶が捨てられていることになるのだ。台湾全土を合わせると驚くべき量になることは間違いない。

恩人の支えに心から感謝

この数年間、玉雲さんの仕事量は減少することにはなかった。毎日毎日十数時間働き続けるなど容易なことではないし、たとえ意志が強くても体は疲労を訴えるものである。それでも歯を食いしばって続けてきたのは、常に人手が足りない中、自分



男性のボランティアがガラス瓶などの重い物を担当している。彼らの中には、元会社社長や元警察官、アルコール中毒のため職を転々とした人など様々な人がいるが、みんな玉雲さんの奉仕の心に感銘を受けて、資源回収に関わるようになったのだという。

玉雲さんはそういう人達が資源回収車を運転して真夜中でも来てくれることがとてもありがたいと感謝する。おかげで、ガラス瓶の回収という負担が随分と軽減されたのだ。ちょうど日の出を迎える頃、資源回収車は回収所へ戻って行く。満載したガラス瓶を降ろすと今度はボランティアが色別



は一人ではない、他にも一緒に作業をしてくれる人がいるのだということに気がついたからだ。そう思うと力が湧いて来て続けられるのだそうだ。

取材中、彼女は終始笑顔を絶やさず語ってくれた。「今は年を取ってしまいました、ずっと環境保全に関わってきました。昔の私はいつもしかめっ面ばかり、でもたくさんボランティアさんに出って考えが変わりました。いつも笑顔でいようと思うようになりました。そのためだけに私は生きているのですよ」。言葉で表せば一言だが、その背中にはこれまでの辛い困難な道のりがのしかかっているのだろう。よほど強い信念の持ち主でないと続けてこれなかったことだろう。普通の人では乗り越えられなかったに違いない。改めて蘇玉雲さんの無償の奉仕に敬意を表し、心から感謝の言葉を送りたいと思う。彼女こそ、身を以て道を示す行動の典型であるといえよう。

生命教育と

慈善の新しい試み

少額の支援金で
透析センターをサポートし
長期にわたって
貧しい透析患者に恩恵を与えてきた
慈善や医療の布施を
異文化の人々に施すには
生命の教育が必要

◎文・葉育盛 訳・慈願
撮影・蕭耀華



●旧正月、ペナンで華人が広福宮の前で布施している。人種も理由も聞かず、ただ布施をするのが華人の美德。新年の布施は長年続いている。

植民地時代の雰囲気が残るマレーシアの首都ペナン。イギリス植民地時代の建築物や教会が多く見られる。マラッカに遅れること一年の二〇〇八年、ペナンのジョージタウンは世界文化遺産に列せられた。

二〇一三年にヤフーが発表した調査結果によると、ペナンのジョージタウン市は世界で四番目、アジアで一番目の「リタイア後に住みやすい都市」である。ここは東西文化の交差点であるだけでなく、移民史の鍵を実証する都市でもある。信仰は、華人の移民に対する心霊のパワーだった。華人は慈善と教育を重視し、

たとえ異郷にあっても奮闘する時は助け合いと自立の精神を重んじてきた。ペナン最古の中国廟である広福宮（かつて観音亭と呼ばれていた）は、一八八〇年に福州地方から移民した人々によって建立されている。廟の前の広場にはいつも善意ある人が貧民に生活物資を配っている姿が見られる。その布施の情景は今なお日々見ることができる。

二〇一五年の年末に、マレーシアの華人たちは来年の漢字に「苦」の字を選んだ。住みやすいペナンで華人が感じている「苦」とはいったいどのようなものなのか。慈済人はこの「苦」に対し、いつ

たい何ができるのだろうか。

発願を堅持する

一九八九年、葉慈靖は台湾からペナンに駐在することになった。そして彼女はマレーシアにおける慈済の初の種となり、人々が慈善を分かち合うきっかけをもたらした。

慣れない異郷での生活と現地社員の管理に忙しく、その重圧は想像以上に大きかった。数カ月後、台湾へ帰って證嚴法師にお会いした時、法師に「環境に適するのは人ではなく、人が環境に適するこ

とです。頭上に人様の天を頂き、人様の地を踏むなら、恩返しすることを忘れてはなりません」との貴い法話を頂いた。

法師の海外にいる弟子たちに言い含められたお言葉を有り難く頂いて、葉慈靖は衣食住や慣れない環境を克服して、台湾にいた時と同じく慈済委員としての仕事を始めた。まず、同僚が抱えている問題に手を差し伸べることから始め、慈済のことを言って聞かせた。

同僚は、イスラム教を国家宗教とするこの国で、マレーシア人に仏教の話をすると、二十四時間以内に強制送還されてしまうかもしれないと注意していた。葉

慈靖は、台湾とマレーシアの違いに慎重に気を配りつつ、善念と慈済精神をどうすれば多くの人に伝えられるかと思考していた。

彼女は少額募金を募って貧民病苦の訪問ケアを始めた。何人かの同僚が、どこそこに貧困者がいると知らせるうちに、貧しい病人の訪問ケアについてくるようになり、慈済という仏教団体は普通の仏教団体とは違っていると思うようになった。

ある時、会社を代表して包装工場を訪問し、工場を経営する郭済航と出会った。工場では目の不自由な障害者を雇用して

おり、彼の心にある愛を感じた。それらの彼女は、この種子を慈済の活動に迎えるため、彼を訪問ケアに誘うようになった。

ある日、彼らが Kampung Baharu Bukit Merah（中国語：紅泥山）の慈済ケア家族を訪問していた時、無責任な夫は知能障害の妻と八人の子供を見捨てて蒸発し、しかも八カ月になる赤子にはまだ血の跡がついているのを見て、郭済航は涙を流していた。そしてこの苦に会ったことが、彼に慈済へ進む心を決心させた。現在彼は慈済マレーシア支部首席執行長になっている。



台湾からマレーシアに初めて慈済の種を蒔いた葉慈靖（右）。マレーシアで根を下ろして成功した郭濟旌（中）。劉濟旌（左）は歴史の渦巻く社会環境の中で実践と安心立命の価値を見出した。

善門に入ることは簡単なようだが、菩薩道を歩くとなると種々の困難に出会う。当時の彼は三十を過ぎたばかりで、多くのことは心霊上の困難であり、事情の上での困難ではなかったと、過去を振り返りかえって思った。要するにマレーシアと台湾の違いは非常に大きいので、マレーシアで慈済を発展させるのは不可能だと思っていたのだ。

しかし、上人がおっしゃった「人種、宗教、社会がどれほど異なっているとしても、人々の心には必ず愛がある。善行は発願だけすればよいのではなく、努力して行う必要がある」という言葉が、彼に力を

与えていた。それから二十数年を経て、堅固な信念があつてこそ、人も己も利することができ、宗教精神の根基を實踐できると体得した。

彼は慈済をさらに深く理解するため、毎月花蓮へ帰って法師の法話を拝聴している。上人がいつもおっしゃっていた「注意深く」というお言葉とは、人生において諸々の難問や発心の過程が、菩薩道の具現なのだと思えた。

「善行とは奉仕だろうか？」。郭濟旌は一つの例を挙げた。ある人が血書した《無量義經》をバザーに出して、得た淨財を慈済透析センターに寄付した。この善行



病氣のために貧に陥る人を救う

現在マレーシア支部執行長を務める郭濟縁は、郭濟航の二番目の兄である。郭濟縁は慈濟透析センターは医療以外に、生命教育を體現したものであると言

う。
ペナンの慈濟ボランティアが訪問ケアをした過程で観察した結果、多くのケア家庭が家族が腎臓病を患ったために苦境に陥っていることを知った。熟慮の結果、

●ペナンの人医会の会員がケア家庭を往診に訪れる。同行した息子はケアの方法を学んでいる。



●ペナンの慈濟志業主任、李妙紅（左）が看護師と透析患者の状況を診ている。透析センターは腎臓病の患者の家族にも関心を寄せている。

がさざ波のように伝わると、それが不思議な力になって愛のさざ波を広めていったと説明した。

衆生を済度したのが反対に済度されているのを目の当たりにし、彼は人の生命が私たちの慧命となってくれているのだから、中途半端に放棄できないと悟った。ペナンの会員が透析センターを護持しているのが、その最も良い例であると言っている。

一九九六年十一月から大胆にも無料の透析センターを開設して、環境保全で得た資金を医療基金に当てることに決定した。

当時は政府運営の医療所以外には無料の透析センターはなかった。透析センターの資金は高く、いつまで続くかと危ぶむ声もあったが、ボランティアが月餅や粽などを作ってバザーで売ったり、さまざまな募金などを行って、慈済無料透析センターの大願は遂に成就し、運営を危

ぶむ声もなくなった。

一九九七年八月に開業した時は、マレーシアのみならずアジア初の快挙だった。その五年後、ジータ、北海でも慈済透析センターが次々に開設し、貧困者に透析治療を行っている。

台湾では国民皆保険が完備されているが、マレーシアの保険制度は今なお普及されていないため、多くの人が膨大な医療費を支払うために家庭が崩壊している。ペナン慈済医療志業の李妙紅主任は、



●腎臓病の李源興が母と自宅前で環境保全の廃品の仕分けをしている。彼は2010年から慈済透析センターで治療を受け、今では精進して慈済ボランティアとなっている。両目はわずかな光線が見えるだけ。もしも仏法という拠り所がなかったら、この世は懐中電灯もない暗闇に等しいと言う。

早期の一般透析費用は毎日が三百五十リングット（約八千七百円）で、毎週三回の治療が必要だった。一般サラリーマンの月給は千五百リングットにも満たない。慈済透析センターの出現は注目を集め、華人の善意と真心もまた讃嘆の的になっている。

人々を慈善に迎え入れる

李妙紅は、透析センターの運営を安定させるのはそんなに生易しいことではないが、経費を捻出するのが困難だからと言って、患者に必要な治療と検査を削る

ことはできない、と患者を身内のように見なして接している。

慈済は金持ちだろうか？ そうではない。マレーシア慈済基金会の資金の七割は少額の寄付であり、このことが社会の信任を得ている理由になっている。また、台湾発祥のこの非政府組織をマレーシア社会が信頼し、護持していることは、金銭にかえがたい榮譽である。

富裕層が好んで善行を行う伝統の中で、慈済は貧しい人にも少額の布施を呼びかける竹筒精神を推進しているのは、ペナンの全国民に慈悲という気持ちをもたすためだ。二〇一五年、慈済はマレ

ーシア政府の要請を受けて、災難調査基金会の運用委員になった。これは慈済の効率の良さと公から得ている信任が、マレーシア政府に認められたことを意味する。ペナン慈済人の成就の鍵は、着実にきめ細かい奉仕と寄付金の使い方にあった。

慈済は人種の分け隔てなく社会のあらゆる問題に関心を寄せる。静思堂では毎日ボランティアが当直して、貧富の分け隔てなく苦しむ人たちを迎えている。この仏教道場では大門を開け広げ、何人も受け入れる。人心の浄化、社会の平安を願う一本の具体的な道でもある。

生活が束の間にも移り変わるこの時代に、人種が複雑に入り混じる国では、多くのことがよくよく熟考しないと通じないことがある。マレーシアに移民した華人の数百年の歴史の中では、ただ渦巻く流れの中で懸命に前進するよりほかなかった。しかし現在のペナン慈済ボランティアの華人たちは、金のために努力しているだけでなく、彼らは自分の安心立命の価値を了解して、互いに友人や同胞の助けを求める声に耳を傾けている。これは人種融合の出発点であり、また人々が深く信じあう将来の始まりである。

アンジェリーにあげた贈り物

アンジェリーは珍しい小児の脳卒中を患った。

昏睡状態から目が覚めた後も勉強を続けたいと願うアンジェリーのために、医療チームは教師、慈済ボランティアと提携して全力でサポートした。

そして、期末試験に受かり新学期には五年生になる

十一歳のアンジェリーにとって、学校に行って友達に会うことが最大の幸せだった。台湾での数カ月の闘病生活の後、彼女は笑顔を取り戻しインドネシアの慈済大愛小学校に帰ることができた。

彼女は生まれた時に血管壁が薄い異常があり、全治することは容易ではないが、学校へ行くことはあきらめていなかった。二〇一六年の三月二十五日、キリスト復活祭の朝。顔を洗って家族と教会へ

行く用意をしていた時、突然全身の力が抜けて右半身の感覚がなくなり、転んでしまった。母親のチン・ショウリンさんがその音を聞きつけて駆けつけ、床に転がっている娘を抱き起こし、バスタオルにくるんだ。

アンジェリーの家はジャカルタ大愛村から近い住宅地にある。チンさんは近くにある慈済大愛医院の救急救命室にアンジェリーを連れて行ったが、あまりに重症だったためチェンカレン総合病院に行

●家で休養中、病気を引き起こした血管の画像を見るアンジェリー。





● 慈濟ボランティアの陳桂雄は、長期に亘ってリハビリに付き添い励ましてきた。
● 担任の先生がアンジェリーの自宅へ来て補習をしてくれた。

くように言われた。病院で検査した結果、左脳の血管が破れて出血していることが分かり、小児脳卒中と診断された。チンさんは十年前に息子が脳の病気で亡くなったことを思い出した。そして今、娘も……。チンさんはアンジェリーさんがいる集中治療室に入る勇気がなかった。



救命線の輪が繋がった

チンさんは事実を受け入れられず、深い絶望の谷底に落とされた感覚だった。教会の礼拝を終えた友人たちが病院に駆けつけて、「必ずよくなりますよ」と励ましていた。

一家の友人のロバートは心配して、慈済大愛小学校のフレディー校長に相談し、校長がすぐに慈済ボランティアに知らせた。

チンさんは娘のそばを片時も離れずに見守り、神に奇跡を起こしてほしいと祈っていた。アンジェリーは集中治療室の病室に入ってから九時間後、突然右足を動かし曲げることができ、舌も出せるようになった。しかし医師は転院してさらに進んだ治療を受けるようにと勧めて、

慈済ボランティアの張建中はその連絡を受けると、楊碧露に知らせた。彼女はサディア私立病院の神経医師ゴナマンさんに頼み、その夜の中にアンジェリーはサディア私立病院に転院し、本格的に治療が始まった。

チンさんは再び絶望感に襲われた。

母親はこの縁がつかないだ援助によって、希望を見出すことができ、「とても

感謝しています。神のお導きによって慈濟はアンジェリーに希望の道を開いて下さいました」と言った。二日後、慈濟ボランティアの陳桂雄が病院へ見舞いに行った時、ボランティア全員で一家を支援する計画を立てていた。

ゴナマン医師は、脳卒中の原因はさまざまで、良くない生活習慣、寝不足やストレスなどがあるが、アンジェリーの場合は生まれた時からの血管異常が原因で、彼が初めて出会った小児脳卒中患者だと言った。

アンジェリーが昏睡状態から覚めないのは、左脳の出血範囲が広いため、ま

ずうっ血を取り除いてから、左側の頭蓋骨を取りはずして脳腫圧を低く押さえ、状態が改善した後、さらに手術をして頭蓋骨をもとに戻すという二段階の治療をすることになった。

命の危険がある手術だが、母親は医師を信じてその決定に従った。三月三十一日に手術を始め、左頭蓋骨を腹部に取りつけた。手術後、自宅で療養を取り、五月十七日に再度手術して左頭蓋骨をもとに戻した。

四月と五月の期間、アンジェリーはボランティアの陳桂雄に付き添われてリハビリと言語訓練を受けた。陳桂雄は、ア

ンジェリーは病魔に打ち勝とうとの強い意志を持った子だと気づいた。声が次第に大きくはつきりしてきて、歩行の進歩も早いと褒めた。

リハビリの間に、母が勉強を続けるかと聞くと「私は勉強をして五年生に上がりたい。留年するのは嫌」と答えた。右手ではまだ字を書けないが、補習したいと強く希望していた。校長に相談すると、

●治療期間中なのに、慈済大愛小学校で熱心に授業を受けるアンジェリー。優秀な成績に両親は安堵している。



◎文・釋德侃／訳・心嫺

法髄移植

承知して担任の蘇先生をアンジェリーの自宅に補習に行かせることにしてくれた。

蘇先生はアンジェリーの熱心な学習態度に感心して、自宅で期末試験を受けさせてくれ、アンジェリーは優秀な成績で無事合格した。二〇一六年六月二十二日、母に付き添われて優秀な成績表を受け取り、来学期から五年生になる。

この日、母親は「アンジェリーの病気を治して下さいとお医者様たち、慈済の熱心なお世話、なかでも治療費を支援してくれたことに感謝しています」と感動して言った。

二〇一六年七月十八日、インドネシアの大愛小学校の始業式が行われた。生徒たちは親に付き添われてにぎやかに校門をくぐっていた。アンジェリーも父親と五年甲組の教室に入った。彼女の将来の希望は、優秀なコックになることで、その夢に向かって前進している。医師や学校の先生方、慈済ボランティア、そして家族は、アンジェリーの生命力と堅い意志に心を動かされ、これからも全力で支持していくことだろう。

（慈済月刊六〇〇期より）

仏法は骨髄と化し、慧命を承えさせ、世の中の人々を益して、恵を与えます。

法髄移植に力を尽くそう

「時間が経つにつれて、生命は日に日に残り少なくなっていくます。いくら長寿だと言っても、いつかこの世を去らなければなりません。ですから、限りある人生を大切にして、命の価値を高めまし



よう」

海外から訪ねてきた慈濟ボランティアとの談話で、上人はこのようなに話しました。そしてこう続けました。「私は最近よく『法華經』を説法しています。過去の生生世世によい因縁を積み重ねたから、『法華經』の微妙な法の真髓を得て、ありがたいことに、現世で説法ができるようになったのです。この因縁をしっかりと把握して、法髓を移植することを心がけています。仏法を胸に、日常生活にこの機能をよく働かせて、仏法が各地に広まって伝わっていくことを願っています」。

仏法の教えを実践した多くの慈濟人は、生活は貧しいながらも心の豊さが人生の方向を変えました。「自ら自分を変えて、真心を込めて人のために尽くす。これこそ法髓の移植が成功した証なのです」

決意があれば、成し遂げられないことはありません。「すでに

菩薩道を歩むと志を立てたのですから、心のなかに誓願があっても、怨みにとらわれない心境を確立してほしいのです。そして、自分の心はどういう状態にあるのかを見極め、『怨』を捨て、『願』だけの心を蘇らせるのです。それに、ちよつとした気まぐれで、菩薩行を怠って慧命に影響を及ぼすようなことは、決してないように」と上人は強調されました。

「ただ熱意だけを以て慈濟の隊列に身を投ずるのでは足りません。もし『戒、定、慧』や『聞、思、修』を修行でしっかりと身につけていないと、ちよつとしたもめごとで心にわだかまりが生じ、前へ進めなくなってしまうからです」と上人は教諭されました。

「仏法との因縁を断ち切ってはなりません」。上人はくれぐれも言いつけられました。「法をしっかりとみ込まないと、人に対して先入観や疑念を抱きやすくなります。仏法の真意を深く理



解すれば、度量が広くなり、奉仕したことに対して見返りを求めたりしません。また、些細なことで悩んだり、心を囚われたりすることもないのです」

「人を助けられる人になることは、最も価値のある人生です。さらなる菩薩道への精進の念を高めましょう」と上人は、皆を励まされました。

「生きた経典」を体得

「出家とは、世俗の家を出て、如来の家に入ることの意味します。身も心も、『辞親割愛』の文字通りに、世俗と自分の家族から切り離さなければなりません」。剃髪の日をまもなく控えた八名の近住女（精舎に住み込んでいる出家前の修行者）と談話しました。「もう出家をすると発心したのでから、一心に仏道を

修行するように。虚心になって仏法を聞き、法の真髄から得られた智慧に基づいて一切の生きとし生けるものが幸せになるように尽くしましょう。そうすれば、自分を産んでくれた両親へのご恩に報いることもできるのです」と上人は諭されました。

「出家した当時、私は二つの大事なことをしました。まずは『心を閉ざす』ことです。世俗のドアを閉ざしたのも、天下のために尽くしたい一心だったからです。次が『身を閉ざす』ことです。慈済の活動だけに勤めるように決心したからです。一途に『仏教のため、衆生のため』に尽力してきました」。

精舎に住む常住僧侶たちは、日ごろ自力更生を維持するために働きますが、ボランティアが精舎に来ると、その食事や宿泊の支度でいっそう忙しくなります。精舎での生活は確かに多忙ですが、出家せずに俗人として家庭に入れば、煩惱も尽きないのではないのでしょうか。「出家修行の長所とは、私的なつまらな



い悩みがなく、ひたすら天下のために尽くすことができるということです。衆生のことを憂慮しても、自分の心は安らぎで落ち着いていられるのです」

各地から精舎を訪ねてきた人々に、常住僧たちは通り一遍ではなく真心を以ておもてなしをします。上人は、「日常生活においては『誠正信実』という自分の本分を守って、信念を貫くべきです。また、『慈悲喜捨』の心持ちで世間の衆生のために奉仕するように」と諭されました。

世のために尽くしながらも仏法を聞くことを忘れてはなりません。すでに心には具わっている法を実践するように。「人間関係に悩んだり、時間を浪費するのは実に惜しいことです。法の奥底まで理解した上で、真心を以て接触した一人ひとりの心意気を感じて、生きた經典のような相手の真実、豊かな人生を体得しましょう。このようにして、仏法を法髄と化し、自分の慧

命を潤わせ、法の細胞が増えるように」と、上人は皆を励まされました。

すでに修行をするとは発心したのですから、もし無明やつまらない悩みを取り除かないまま、法を聞くことも怠れば、せっかく結んだ良い因縁が無駄になるでしょう。上人は「このかけがえのない修行の因縁を把握して実践し、心の中にある悩みや苦しみを取り除きましょう。そして、命の価値をもっと高めていくように」と諭されました。

慈濟大事記十一、十二月……………

訳・済運

11・25	嘉義大林慈濟病院の林名男副院長が率いるチームがネパールに赴き、医療廃棄物管理討論会に参加した後、今日、ネパールヘルスケア基金會と共同で Tekchok Ling 尼僧修道院で無料の腎臓病検査活動を行い、234人が訪れた。
-------	---

11・26	◎慈濟マレーシア・マラッカ支部と南マレーシアの各支部は10月22日から11月26日までに合計3384人の学生に奨学金を支給した。 ◎北区慈濟人医会は台北慈濟病院チームと合同で、26日と27日、金門で2016年下期の施療を林湖村役場と上岐村役場で行い、合計延べ640人を診察し、七世帯の往診を行った。 ◎慈濟基金会の桃園市政府台風ソーディラ被災者援助への支援で、復興区合流集落14世帯の被災者向けに恒久住宅を建てることになり、当日、起工式で林碧玉副執行長と鄭文燦市長が鍬入れをした。
11・27	慈濟フィリピン支部はリザル省サンマテオ町で第216回目の施療を行った。フィリピン、マレーシア、ベトナムの人医会メンバーがサン

12・02	12・01	付活動がヘンダーソン市サンティモシー教会で行われ、69人に防寒用品を配付すると共に炊き出しを行った。 慈済科技大学の教師と学生は12月1日から4日まで韓国ソウルの国際発明展に参加し、予防注射針の保護ケースや輸液逆流防止装置、体を引き上げる動作の補助装置、七分でできる運動補助装置、医薬用アンプルを切断する装置などで金メダルを一個、シルバーを3個、銅ドメダルを一個獲得した。 ヨーロッパの慈済ボランティアは2日から7日までセルビアで2回目の難民を対象にした冬季の配付活動を行った。アダセヴィシ、シド、プリンスボワジ、プリシエボ、スボティカ、ソンボール、バニヤコヴイリヤザなど9つの難民キャンプで合計ジャケット4800枚と帽子
-------	-------	--

11・29	11・28	マテオ高等学校で歯科、眼科、漢方科を初めとする科で2215人の診療を行った。 ◎慈済基金会はバチカン移民及び難民牧羊委員会の要請で、11月28日から12月1日までバチカン近隣諸国に留学している慈青4人が仏教界を代表して第四回国際学生牧羊会に出席した。主にカトリック信者の学生が貧困救済や素食をアピールし、生活に根ざした仏教を紹介した。 ◎慈済の慈善、医療、教育、人文の四大志業体はヨルダン国内に留まっているシリア難民の子供たちを支援するため、静思堂で「プリンスとプリンスを支援する」愛の心を募る募金活動を始めた。 慈済アメリカ、ラスベガス支部と「砂漠の友人基金會」合同の冬季配
-------	-------	--

12・09	し、百人を超える死者が出た。セマウエとメダンの慈済ボランティアは直ちに支援活動を展開し、物資の集結を始めた。9日から被災地で物資の配付を開始し、現地の病院と協力して被災者に医療奉仕する。 ◎日本慈済ボランティアは9日から12日まで「東日本大震災」の被災地である岩手県と宮城県で合計四回の歳末祝福感恩会を催した。被災者の現況への関心の他、「高雄市美濃地区地震」被災者を募金で支援した釜石市、宮古市、東松島市及び宮城商工中金青年会に感謝状を贈呈した。 ◎カナダバンクーバーの慈済ボランティアはサルベージンアーミー支部でホームレスと低所得者及び薬物中毒更生者に対する防寒服と靴下、日用品の配付活動を3回行った。
-------	---

12・07	2800個及びマフラー、手袋を配付した。また、9日、慈済本部からの1、8トンの即席飯などが当国に到着する。 ◎アメリカ・ニュージャージー州ブランズウィック市の慈済ボランティアは食糧支援団体「エリジャプロミススूपキッチン」で60人に炊き出しと防寒用具の配付を行った。 ◎12月3日、新北市蘆洲區民族路の工場で火事が発生し、トタン屋根の工場十数棟が焼けたが、負傷者はいなかった。慈済ボランティアは通報を受けて消防署員に炊き出しとパン、飲料水を届けた。ボランティアは4日に査定し、5日に拠点を設置して9日まで延べ280人を投入して炊き出しと見舞金、祝福ギフトの配付を行った。 7日、インドネシアアチェ州北部でマグニチュード6.5の地震が発生	12・03
-------	--	-------

1 2・1 9	慈済基金会は第13回フィリピン大統領が授与する Kaanib 賞を受賞した。慈済が長年、台湾在住フィリピン労働者への施療と健康診断を行って来たのと、フィリピン国内での重大災害や貧困者、病人に対する人道支援をしてきたことに感謝するもので、ドウトルテ大統領自らが慈済フィリピン支部の楊国英執行長及び慈済人医会洪宏典医師らに授与した。
1 2・1 8	国際移民デーに合わせて、慈済人医会は移民局と宜蘭県勞工処等の要請で蘇澳区漁業組合の競り市場で施療を行い、外国籍漁船員に内科、歯科及び漢方医科の診療奉仕と共に、冬服の配付と無料散髪を行った。
	2016年の地震被災地であるフェナーレミア、サンベネデット、ボルボナで歳末祝福会を催し、442世帯に物資を配付した。

1 2・1 6	イタリア地震慰問団一行54人は16日から18日まで2012年と
1 2・1 2	花蓮慈済病院研究部門は「幹細胞成長補佐薬 (Mitoburst)」を開発し、国際的な特許を取得した。今日、慈済医療財団法人と台湾尖端先進バイオテクノロジー医薬股份有限公司が特許提供に合意した。慈済医療財団法人の林俊龍執行長と当公司の蘇文龍董事長が代表で花蓮慈済病院にて合意書を取り交わした。
1 2・0 7	慈済タイ支部はタイ北部で冬季の配付活動を行った。ブルーアンドホワイト医療奉仕基金會、ナリー病院、フォン地区理髪組合及びチェンマイ慈済学校の教師と生徒たちが協力してチャイプラカン3千世帯の住民に毛布と布団、冬物衣類を配付すると共に、施療と無料散髪を提供した。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和
平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88
号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷
7 弄 35 号
TEL: 886-2-27760111
FAX: 886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ
総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885
カナダ
TEL: 1-604-2667699
メキシコ
TEL: 1-760-7688998
ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972
ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091
イギリス
TEL: 44-20-88699864
フランス
TEL: 33-1-45860312
ドイツ Hamburg
TEL: 49-40-336806
オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511
スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883
オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988
南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365
香港
TEL: 852-28937166

フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3
ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001
マレーシア Penang
TEL: 604-2281013
ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494
マレーシア Penang
TEL: 604-2281013
シンガポール
TEL: 65-65829958
インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889
ブルネイ
Kuala Belait
TEL/FAX: 673-3336779
ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305
トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802
オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666
ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2017年1月19日発行・241号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



台湾の愛がシエラレオーネに届けられた

アフリカ西海岸のシエラレオーネ共和国が、10年の内戦とエボラ出血熱による影響で苦しんでいる。慈済は台湾農協が提供した200トンの白米を同国の貧しい町に寄贈した。慈済ボランティアが白米を配付するのに協力してくれたカトリック教カリタス基金を訪問し、エドワード・キャールズ枢機卿に感謝の気持ちを表した。

(撮影・蕭耀華)

